

言葉は漢字とともに学習せよ

言葉の覚えられない、重度の脳障害による精薄児を指導したことがある。物と、その物の名を表した漢字カードを一緒にして置き、漢字がその物の名前を示す符号であることを教える。例えば、花瓶の花に“花”という漢字のカードをぶらさげておき、「“花”が花を表している」ことを教えてやるのである。このような漢字カードを数枚教えてやった後、それぞれのカードを物と対応させて置く仕事を課す。すると、それまで全く光のなかった目をきらきらさせてこれをやる。精薄児も知的な作業は喜んでやるのである。

このような学習を、毎日、くり返し、くり返しやらせていると、ある日、突然、花を指さして「はな」と言い、“花”という漢字カードを指さして「はな！」と読むようになる。やさしい漢字の学習が、それよりむずかしい言葉の学習を成功に導いたのである。このように、漢字の学習は、言葉の学習を容易にする効果があるだけではない。言葉の理解を深めたり、記憶を確実なものにするのにも役立つ。

例えば、“時刻と時間”という言葉は漢字で学習すれば、その理解が正確で、かつ深いものになる。だから、漢字で学習した子供たちは、「明日の遠足の集合時間は 8 時 30 分！」という教師の言葉の誤用を決して聞き逃さない。

古語で、物の突き出た所を表す言葉に“はな”という言葉がある。“端”という漢字がこの言葉の意味を表している。“鼻”は、顔の中に突き出た所であるから“はな”と呼んだものであろう。

同様にして、“花”も、草木の茎や枝の突き出た所に咲くものであるから“はな”と呼んだものであろう。つまり、“鼻”は“顔の端”であり、“花”は“茎や枝の端”であり、端と花と鼻はもとは同じだったのである。

それを漢字で表す際、使い方の違いによって、これを区別して表した方が便利だ、ということで、それぞれ別の漢字を当てるようにたったものである。それが今では、字が異なるために同音異語のように思われている。

このような言語は勿論、“橋と箸”“釜と鎌”“歯と葉”のような同音異語は、漢字と共に学習した方が解りやすく、かつ記憶にとどまりやすい。聴覚的な言葉に視覚的な文字を関係させて記憶すると、言葉だけでする記憶の六倍半の記憶効果がある、という調査結果もある。

昔から「百聞は一見に如かず」と言われているように、視覚的印象が聴覚的印象よりも強く優れ効果のあることは何人も認めるところである。従って、その視覚と聴覚と結びついた記憶が、聴覚だけの記憶よりも強固なものになることは、言を俟たないであらう。

ところが、わが国の小学校では、“じかん”“じこく”というような“かな”表記で言葉の学習をさせている。表音文字であるかな表記では、“時刻”“時間”のような視覚文字の効果が出て来ない。だから、時刻と時間の概念の違いを教えているのにもかかわらず、理解が浅いため直に両者が混同してしまうのである。